

二つあるベッド、木目調の立派な机、大きなお風呂、何だかよくわからないが高そうな絵画、そして窓から見えるのは北アルプスの山々。絵はがきでも買いたくなるような素晴らしい綺麗な景色だ。

「今、僕は出張先のホテルにいる。

職業は会計士。身分は下っ端。

そんな下っ端にもかかわらず、今回の出張ではツインの部屋を用意された。一人でしか泊まらないのに、である。

毎回、いい部屋に泊まれるわけでは決していない。ただ、こついつときもたまにあるらしい。まあ、僕は入所一年目だからすべて聞いた話に過ぎないのだが。

仕事は各企業の監査。職場は主に東京。

東京にある中堅飲料水メーカー大伴飲料株式会社（おきん）の監査を担当しているのだが、今日はその監査の一環として、主査の萌さんと二人で同社の製造工場がある北陸の富山県に来ているのだ。

萌さん こと藤原萌美（もえみ）さんは、僕と一緒に出張に来ている公認会計士で、入所四年目。大伴飲料の主査としてここに来ており、僕の上司に当たる。

主査 とは監査の現場監督のことで、大伴飲料の現場については萌さんが責任者なのである。

萌さんは全国最年少で公認会計士二次試験に合格し、今も現役の女子大生というのだからずいぶんと若い。

それに引き換え、入所一年目の僕 こと柿本一麻（かきもと）は今年で二十九歳の会計士補^[01]。大学三年の就職活動の時期になっても進路を決められず、親から何か就職できる資格でも取りなさいと言われたため、絶対就職できるといふ文句につられて会計士試験の勉強を始め、七年目にしてついに合格したという経歴だ。

新入社員が二十九歳というのも一般企業ではあまりないと思うが、会計士業界では別に珍しいことでもなんでもない。一年上の先輩には三十八歳で合格という人もいる。

だから、上司のほづがずいぶんと年下というのもなんら不思議な状況ではないのである。

会計士補 とは公認会計士二次試験に合格すると与えられる資格。会計士補として3年間仕事をし、公認会計士三次試験に合格すると 公認会計士 となる。

すばやくスーツに着替えてロビーに出てみると、萌さんはソファに座って自分のノートパソコン^[02]を見ていた。

「カッキー、おはよう」

萌さんはさわやかな笑顔で挨拶をしてくれた。一方、僕は二日酔いなのでかなりやつれている。

「おはようございます。それにしても、萌さん、あれだけ飲んでいたのに全然平気なんですか」

「当たり前よ。あれくらいで酔っていちや、会計士なんてやってられないわよ。カッキーは 会計士に必要なのは、一に体力、二に筋力、三、四がなくて、五にお酒って会計士受験の専門学校で習わなかったの?」

「習ってるわけじゃないですか。だいたい勉強は必要ないのですか」

「朝っぱらから、いちやいちやとうるさい男よねえ」

「そんなこと言われても」

「もう、まあいいわ。じゃあ、例のアノ件 についてちょっと話し合いたいから、そのレストランと一緒に朝食でも食べない?」

萌さんは笑顔でそう言うと、ノートパソコンを閉じて立ち上がり、ホテル内にあるレストランへと向かって行った。

「それでねえ、例のアノ件 についてなんだけども」

朝食バイキングで取ってきたポテトサラダを口に入れながら、萌さんが話を切り出した。

「私たち確かに聞いたわよねえ」

「ええ、聞きました。ほとんど寝ぼけていましたけど、はつきりと。島山工場長が言いました UKから払うぞ と」

UKから払うぞ 話は昨晚の話にさかのぼる。

昨日、萌さんと僕は東京での仕事を夕方には切り上げ、羽田発富山行き最終便の飛行機で富山入りした。空港には大伴飲料富山工場の島山工場長と経理課の神保

ノートパソコンは僕ら会計士にとって必需品である。なぜなら、監査結果の情報はもちろんのこと、監査の手法や各企業の内部データもすべてこの小さなノートパソコンに詰め込まれているからである。これらの情報はもちろんすべて重要機密。もし、外部に流れるような事があれば一大事である。

課長が迎えに来てくれて、その日は歓迎の意味を込めて食事が催された。この場合、大伴飲料さんのほうが僕らにおごってくれる。まあ、うちの業界ではよくある話である。^[03]

高級レストランでの食事も無事終わり、それじゃ、軽く一杯 ということ、次は高級クラブで飲むことになった。

もともと酒に弱い僕は最初の三十分で、おやすみモード に入ってしまったが、酒には滅法強い萌さんは夜中一時過ぎまでガバガバ飲んでた。

そして、お勘定というところで、畠山工場長が言ったのだ。

「神保、まだ UK は余ってるよなあ。ここのは UK から払うぞ」

普通の食事の場合、会社側（ここでは大伴飲料）はちゃんと領収書をもらい、交際費 としてちゃんと帳簿に載せている。しかし、クラブやキャバクラといったところで飲んだ場合、なかなか帳簿に載せることはできない。なぜなら、帳簿は会計士や税務署員といった外部の人間が見ることができからである。

だから、そう言う場合は、地位の高い人が自腹を切るか、会社に裏金を用意して

おいてそれを使うしかない。

UK から払うぞ 「この言葉は、おそらく酔っ払った畠山工場長が口を滑らせて

言ってしまったのだらう。UK これは明らかに裏金を示唆している。

「それで、萌さん、今日はその UK について調査するんですか」

僕はソーセージを頬張りながら訊いた。

「カッキー、当たり前でしょう!! 会社の裏金なんて私は絶対許さないわ」

「でも、どこの会社にも大なり小なり裏金なんて作っているでしょう？ ちょっとぐらいなら見逃してあげてもいいんじゃないですか」

僕がそう言つと、萌さんはちょっと怒った顔になった。

「バカね、あんたは。嘘が書いてある帳簿を見せられても悔しくないの？ み

すみす騙されるって言うの？ 信じられないわ、そんなの。少なくとも、私の前では一切の隠しことは許さないからね。私に黙って裏金作りをするなんて上等じゃない！ 今日徹底的に調べてやる！ 裏金 UK とやらのカラクリを」

普段はかわいかわい顔をしているだけに、怒るとけっこ怖い。

普段、経理部の方たちは会社の経費で飲む機会が少ないため、会計士が出張で監査に行くとこそこそとばかりに 会計士との親睦を深める という名目で飲みに行くこともある。

「……ええっと、萌さん。それにしても、裏金ってどうやって作るんですか？
 僕は何とか話をそらした。」

「そうねえ、裏金って言うのは、基本的に二パターンあるのね。入金があるのにな
 いように見せる場合と、出金がないのがあるように見せる場合ね。」

「入金があるのにないように見せる場合ってどついうケースなんですか？」

「売上があったのを内緒にしておけば、その売上代金が裏金になるわね。簿外入金
 とどついうのよ。」

「なるほど。じゃあ、出金がないのにあるように見せる場合とどついう
 ケースなんですか？」

「そうねえ、この場合は偽の出費を作るの。例えば、本当は出張なんかに行ってい
 ないのに飛行機代やホテル代を出したように見せかける。カラ出張とか。そうす
 れば、その飛行機代やホテル代を裏金として貯めることができるでしょう。どつう
 うのを架空出金とどついうのよ。」

とても女子大生がする会話とは思えないが、会計士という職業がそうさせるので
 あるつ。

「それで、カッキー。UK って一体、何の略称だと思つ？」

萌さんはいっつになく真剣な様子だ。

「売掛金だから UK ではないんですが。」

「そうねえ。可能性としては考えられるから、それは私が調べてみるわ。じゃあ、
 ほかにないかしら？」

「ユナイテッド・キングダムで UK というのは？」

「イギリスね。確かにそれも考えたわ。でもさっき調べただけで、この工場、海
 外との交流はまったくないの。だから、ちょっと考えにくいわ。」

「じゃあ、ウラガネだから UK ってどついうのは？」

「ウラガネだったら、UK じゃなくて UG でしょ？」

「あつ、そうか。それじゃあ、浦和高校で UK ？」

「どつして、高校が関係あるのよ。」

「宇宙人交流会で UK ？」

「それは一体何なのよ……！」

僕らはこのように情報の整理を行い、ミーティングを兼ねた朝食を終えた。

八時過ぎ、僕はホテルからタクシーに乗り、二十キロほど離れた大伴飲料富山工場へと向かった。

「ほら、萌さん、見てくださいよ。この絵はがき。さっき、ホテルで買ってきたんですよ。北アルプス山脈がすごく綺麗でしょう」

僕は隣に座っている萌さんに話しかけた。タクシーの中では会社についての話題をするのは厳禁なので、通常こういったたわいもない話をよくする。

「そうねえ、確かに綺麗ね。それで、カッキー、その絵はがきを誰かに出すの？」

「もちろん、柿本一麻。宛てに富山から出すんですよ。ちゃんと切手もさっき買ってきましたし」

「あんた、自分から自分に絵はがき出すの!?! そんなことして楽しい?」

「別にいいじゃないですか。出張から帰ってきて二、三日経ったあと、ふと郵便受けを見るとそこには、美しくそびえる北アルプスの山々が。ねっ、いい感じでしょ」

「ねっ、じゃないわよ。いい年した大人が! だったら三日後、事務所にあるカッ

キーのレターケースに絵はがきを入れておいてあげるから、その切手、私に頂戴よ」

「切手をどうするんですか」

「もちろん、売るのがよ。五十円の儲けだわ」

萌さんは年の割には意外とせこいことを考える。もう少し若い女性らしくしてもいいんじゃないだろうか……。

八時三十分過ぎに海辺にある立派な工場に到着した。

出迎えには、昨晚一緒に食事をした経理部の神保課長が来てくれた。

玄関で軽く挨拶を済ませると、工場の離れにある事務センターの会議室へと通された。今日の仕事場はこの会議室である。

監査の仕事では、通常その監査先の会社の会議室等を借り、そこにさまざまな会社の資料を持ってきてもらって僕らが作業をするのである。

「それでは、神保さん。この一年間の会社の帳簿類をすべて持ってきていただきますんか」

萌さんは、会議室に着くとすぐに神保課長をお願いをした。これが監査の開始の

合図である。

「藤原先生、経理部はこの会議室のすぐそばなので、いくらでも持ってこれますから。それじゃ、よろしくお願い致します。」

作業服に身を包んだ痩せ型の中年男性である神保課長は、そつ言つといそいそと会議室を後にした。

「じゃあ、カッキーはパソコンの準備をして。毎月の試算表^[04]の数字をすべてパソコンに打ち込むのよ」

というわけで、僕に今日与えられた最初の仕事は、この毎月の試算表を会社からお借りして、数値をひたすらパソコンに打ち込むという 月次推移表 の作成にたった。

四月の売上は一五 万円、五月の売上は一七 万円、六月の売上は一四 万円……。

このようにひたすら数値をパソコンに打ち込み、月ごとの動きや特定のある月に

異常な数値が出ていないかを調べるのである。こつこつのを 分析的手続 といい、監査で重視される手法の一つである。

二時間ほどして、エクセルへの数値の打ち込みを完了した僕は、データをプリンターアウトして、さっそく萌さんに見てもらった。

「うーん、おかしいわね。費用にしても収益にしても何らおかしな変動はないわじゃあ、カッキー、今度は五年分の試算表をもらってきて、それを打ち込んで」

今度の仕事は五年分の数値を打ち込んで 年次推移表 を作成し、その変動を見るという 分析的手続 だ。

また、二時間ほどして、エクセルへの数値の打ち込みを完了。出来上がった表を、また萌さんに見てもらった。

「うーん、ここ五年間で見てもおかしな数値は発生していないわね。ということとは毎年決まった金額だけ裏金を作っているということかしら」

萌さんは困った顔をしていた。

試算表とは、会社の資産・負債・資本・費用・収益といったすべての数値が書かれてある表のことである。これは普通、毎月ごとに集計されて作られている。

時計を見るともう十二時をまわっていた。

「萌さん、お昼いかがですか とさっき工場長がおっしゃっていましたが、行かなくていいのですか？ この時期の富山ですから、きっとホタルイカとかご馳走してもらえますよ」^[05]

僕は萌さんに言った。

「へえー、ホタルイカねえ。あの小さくてツルツとした触感がたまらないのよね じゃ、ないでしょ、カッキー！ もう十二時を過ぎているのよ。今日中に東京に戻らないといけないんだから、羽田行きの出発時刻と富山空港までの時間を考えると、タイムリミットは午後六時。もう、あと六時間もないので。今日はお弁当を取ってもらいましょう。ちよっと、畠山工場長に言ってきて」

「はい。でも楽しみにしていたんですけどね、ホタルイカ」

僕は せっかく出張に来たのに という思いがあつたため、ちよっと気落ちした。

そんな僕の様子を見てか、萌さんが言った。

「そうそう。去年この工場に監査に来た先輩が言っていたんだけど、ここの昼食ではホタルイカをおつまみにしてビールが出るそうよ」

「あつ、それいいじゃないですか。真つ昼間からビールなんて贅沢の極みですよ」

「あのねえ、ビールが真つ昼間から出てきちゃ、あとは監査にならないじゃない！

「この人たちはきつと UK を隠すために、これまで ホタルイカ&ビール作戦で会計士を骨抜きにして、これまで発覚を逃れてきたのよ」

「でも、酔わない程度に飲めばいいというわけには……」

「ダメったら、ダメ！ 監査一般基準・八 監査人は、仕事中に酒を飲んではならない っていう条文を専門学校で習わなかったの!？」

「 仕事中に酒を飲んでほならない って監査人じゃなくても、社会人として常識じゃないですか」

「まあ、そんなんだけど。でも、会計士の場合それが常識とは思っていない人もいるから、ちゃんと条文にして書いておかないと、昼間からビールをガバガバ飲む人も出てくるのよ。だから、何が何でもホタルイカやビールはダメ。会計士の品性が疑われるからね。それじゃあ、とつととお弁当食べて次の仕事に取りかかるわよ！」

会計士の昼食代が会社負担になるかどうかは、当初の監査契約によって異なるため、すべての会社で昼食代をおごってもらえるわけではない。

十二時半頃、会議室に海の幸がふんだんに盛り込まれた立派なお弁当が運ばれてきた。僕らはお弁当をほおぼりながら、午前中の監査について話し合った。

「……それで、萌さんのほうは何か成果が上がりましたか」

萌さんは、売掛金などを絡めた簿外入金のほうについて調べていたので、僕はその結果について訊いてみた。

「こつちも成果はないわね。この工場の売上はすべて東京の本社に対してなの。だから、東京本社の仕入金額とこつちの売上金額が一致していなければ不正の疑いがあったんだけど、いくら調べても完璧に一致していたわ。ほかへの売上も考えにくいから、簿外入金の可能性は低いわね」

時間はもう一時をまわっている。

萌さんの言うタイムリミットの午後六時まで、あと五時間。

「仕方ないわね。あとは、架空出金のほうをなんとかしてでも見つけるしかないわね。

カッキー、最終手段に出るわよ」

神保課長に頼んで、しょうぼうのりょうごう証憑類と書かれた大きなファイルを数冊持ってきてもらった。

この証憑類のファイルには、すべての出費についての証拠となる資料、具体的には領収書や納品書、請求書などが入っている。これは、会社が出金したときに相手の会社からもらう書類なので、出金したという事実を示す動かぬ証拠になるのである。

つまり、帳簿上は出費があるのに、領収書などがないものがあれば、それは架空出金の可能性が高いのである。

「それじゃ、カッキー。手分けして、すべての出費について調べるわよ。私は仕入をやるから、カッキーは販管費をやって」

販管費とは、「販売費及び一般管理費」の略称である。一言で販管費といっても、販売促進費 荷造運賃 賃借料 役員報酬 給料手当 退職金 福利厚生費
リース料 通信費 旅費交通費 支払手数料 保険料 水道光熱費 消耗品
費 交際費 などなど……と無数にある。

「えっ、萌さん。これをすべて一つ一つ調べるんですか」

「当たり前でしょ、それくらい。カッキーには真実を追求する会計士としての根性はないの？ 専門学校で習ったでしょう 会計士は、一に辛抱、二に忍耐、三、四がなくて、五にど根性 って」

「そんなの専門学校時代に聞いていたら、受験する気なんてなくすじゃないですか。だいたい、朝と言っていることが違いますし」

「あー、つべこべ言わない！ もっ、さっさと始めてよ。今晚は東京で大事な用事があるんだから本当に時間がないのよー」

萌さんはそう言い放つと、さっそく自分の仕事に取りかかった。

三時間後。

「ふっー、萌さん。全部調べましたけど、すべての費用にちゃんと領収書がありませんでしたよ。カラ出張もなかったですし。どれひとつ不審なものなんてありません」

僕は徹底的に調べたのだが、費用のほとんどすべてに領収書がちゃんとあり、領収書がないのといえ、千円程度の交通費ぐらいであった。こういった細かい交通費については、領収書がないのも仕方がない。

「うーん、困ったわね。私のほうも、おかしいものがないのよねえ。どうしようも四時をまわったし」

萌さんも腕時計を見ながら困り果てていた。

「萌さん、ちょっと質問してもいいですか」

僕はちょっと気になったことを聞くことにした。

「いいわよ、何？」

「領収書が絶対もらえない出費ってないのですか」

「まあ、交通費や募金とかだけど、領収書がもらえないのはどれも少額の場合だけだからね。とても飲み代を払えるだけの裏金を作るのは不可能だよ」

「じゃあ、領収書があってもお金を払わなくてもいいものってないんですか」

「領収書があってもお金を払わなくてもいいものねえ。架空の領収書とかだったらそれも可能だけど、これまで調べた中では偽造領収書もなかったしね」

「それじゃあ、えっーと、えっーと……」

「カッキー、もうネタ切れなの!!」

「そんなこと言わないでくださいよー！ 萌さんのほうこそ、何かないのですか」

「そうねえ　北アルプスって本当に綺麗よね」

萌さんは窓のほうを見つめながら言った。

「萌さん！　現実逃避しないで真剣に考えてください！」

「わかってるわよ　でも、ちょっと待って。北アルプスに、綺麗な山脈、絵はがきのような風景　あつ、わかったような気がする」

萌さんはそうつぶやくと、もう一度ノートパソコンを開いて　年次推移表　のデータをまじまじと見つめた。

「そうよ、そうよ。なるほど、これは確かに　UK　よね。それに、この工場にこの数値は確実におかしいわ。毎年ほぼ同じ金額だけど、この金額は大きすぎるし」

萌さんはそうつぶやくと、僕のほうを振り返って真剣な顔で言った。

「カッキー。　島山工場長と神保さんと呼んできて！　あと、北アルプスの絵はがきも準備しておいたほうがいいかもね　」

5

島山工場長と神保課長が僕らのいる会議室に入ってきた。

「藤原先生、柿本先生、お疲れさまです。今回の監査はもう終わられたんですね。それではもう飛行機の時間もあることですし、タクシーのほうをこ用意致しておきますから」

島山工場長は丁寧な口調でそう言うと、タクシーを呼ぶために会議室を出ようとした。

「島山さん、ちょっと待ってくださいませんか」

「えっ、藤原先生。まだ終わられていなかったのですか」

「いいえ、監査はおかげさまで終了致しましたわ。実は、ちょっとお願いしたいことがあるのですが」

萌さんは上目遣いをして言った。

「おや、それは一体なんですか」

島山工場長が尋ねた。

「誠に申し訳ないのですが、うちの柿本が絵はがきを出したいと言っているのですが、もしよろしければ切手を一枚頂戴できませんでしょうか」

「えっ、萌さん！ 僕、ちゃんとさっき切手を買ってきましたよ」

僕は驚いて、萌さんに小声で耳打ちした。

「カッキーはちょっと黙っていて！ あとで事情は説明するから」

萌さんに逆にそつ耳打ちされて、僕は黙っておくことにした。

「藤原先生、切手ですね。いいですよ、安いものですから。一枚でいいですよね」

神保課長、経理部から切手を持ってきてくれないか」

畠山工場長は神保課長に命じた。

「あっ、神保さん、ちょっと待っていただけませんか。できれば、ついでにこの工

場にあるすべての切手を見たいのですけど、よろしいですか」

萌さんは最高の笑顔で、畠山工場長や神保課長に了解を求めた。

「……すべてですか」

笑顔の萌さんとは逆に、畠山工場長と神保課長の顔面がみるみる蒼白になっていた。

「ええ、切手をすべてです」

萌さんが相変わらず最高の笑顔で、しかし念を押すように強く言った。

僕らは経理部の中へと案内された。そして、神保さんは壁際にある戸棚の引出しの一つを開けた。

「切手を保管している場所はここなのですが……」

神保さんは恐る恐る萌さんに言った。

「そうですね。それでは、柿本さん、切手の枚数を確認してもらえませんか」

そう言われて、僕は引出しの中から切手を取り出した。

「ええっーと。五十円切手が五枚と、八十円切手が三枚。そして、二 円切手が

一枚ですね」

「柿本さん、ありがとう。金額ベースでいうと全部で六九 円ですね、神保さん」

萌さんが神保さんのほうを直視して言った。

「……」

神保さんは沈黙している。

「あれっ!! おかしいですわね。確か、試算表では郵便などの通信費は毎月一 万

円から二万円ほどになっていたはずですが、それも領収書を見ましたら、そのほとんどが郵便切手による購入のようでしたわ。ということは、よほどこの工場では郵便物が多いのですね」

「……」

「でも、手元にある切手がわずか六九円って、おかしくありません？ 毎月一万円以上も購入するのですしたら、もう少しここに多く残っていてもいいのではありませんの？」

「……」

「もしかしらば、もう全部切手は使い切ってしまったのかしら？ そういえば、この工場がDMを大量に発送しているという話はまったく聞いておりませんが、購入した月一萬円の切手がどこへの郵送に使われたのか、教えていただけませんか？」

「……」

「郵便切手については、購入時には領収書をもらえますが、使うときは手紙に貼ってしまうので、使ったという証拠が残らないですよ。だから、私たちが調べても切手の行方はわかりませんでした。もしかしらば、この工場のどこかに郵便

切手 だけ残っていませんか？」

「……」

畠山工場長と神保課長はずっと沈黙を守ったままだった。

「も・し・か・し・て、郵便切手を大量に買って保管しておき、切手の使用は領収書がいらぬことをいいことに、使い終わったことにしているとか」

萌さんは再び上目遣いで二人を見た。しかし、彼らは顔面蒼白で黙ったままだった。

「つまり、私はあなた達が通信費という架空の出金をでっち上げている、って言っているのよ」

それまで丁寧だった萌さんの口調が明らかに怒りを含んだものに変わっていた。畠山工場長と神保課長の表情は完全に凍りついてた。

「あー、萌さん。裏金作りに切手を使っていたというのはわかりましたが、いまいちそのカラクリがわからないのですが……」

沈黙が支配する雰囲気の中、僕は恐る恐る萌さんに訊いてみた。

「仕方ないわねえ、カッキー。じゃあ、説明するわよ。まずね、郵便局とかで切手

を大量に買うじゃない。例えば、ひと月に一 万円ね。そして、その切手一 万円分は通信費として使ったことにしてしまうの。次に、一 万円分の切手を格安チケツト屋に持って行って換金すれば、一 万円の切手なら九万五 円くらいで売れるじゃない。これを繰り返し返せば、一年で一 万円くらいは軽く貯まるでしょ」「なるほど、実際に出金して買った切手をまた現金に戻すことで、架空出金にするんですね。領収書は切手を買ったときにもらえるから、切手を使ったかどうかなんで全然気にしなかったですよ。でも、萌さん、いつそのカラクリに気が付いたのですか」

「今朝、カッキーが北アルプスの絵はがきの話をしたとき、私が言ったでしょ。切手を売って五十円儲ける っ。切手は換金しやすいってことを思い出したの

よ」

萌さんはそう言って僕にウインクしてくれた。

6

その後、畠山工場長、神保経理課長とともに裏金作りについてその事実を認めた。もう十年以上前からやっていたことらしく、裏金の総額は三千万円以上。あまり堂々と表で使えない費用については、すべてこの U K と呼ぶ裏金を使っていたそうだ。

どうして U K かというと、郵便切手 だから U K だそうだ。

僕にはどうでもいいことにしか思えなかったが、萌さんは 郵便切手 だったら Y K じゃない！ と最後まで工場長に噛みついていた……

時計の針はもう六時を指し示そうとしていた。僕らはもう時間がないため、会議室に戻って帰り支度を始めた。

「萌さん、この裏金の件についてはどうするのです？ とりあえず、警察に告発しますよね。それから、それが新聞記事になって、そのあとテレビのインタビューに 応えて……」

僕は、レポーターを前に いやー、この裏金のカラクリを発見するには苦勞しました と語る自分の姿を空想していた。

「 カッキー、目を覚ましなさい！ そんなに話が大きくなるわけがないじゃない。私たちは何もしないわよ」

萌さんが、冷たい目つきで言った。

「 なー。テレビや新聞に出るんじゃないんですか!?! せめて富山ローカルでも……」

「 テレビや新聞に出ないのはもちろんのこと、警察なんかにも言わないわよ」

「 ど、どうしてですか？ 三千万円もの裏金があったんですよ。どうして、何もしないのですか!?!」

「 カッキー。私たちの仕事は不正を暴いたり、悪を懲らしめることでは決していないわ。私たちの仕事は 企業の発表する数字が正確である ということを証明することよ。だから、私たちは確かに裏金を発見したけど、帳簿をちゃんと訂正するかどうかの判断は大伴飲料の人たちがすることなのよ」

萌さんは僕をさとすように言った。

「 じゃあ、もし、裏金について大伴飲料が公表しなければどうなるのですか」

「 そうね。そのときは会計士としての権力を使うのよ。つまり、この企業の発表する数字が正確である ということを証明してあげないの。まあ、こんな権力使っちゃったら、会社は潰れちゃつかもしれないから、できれば使いたくはないけどね」

萌さんはいたずらっ子のような表情で笑った。

「 いい？ 私たちは経済の世界に一つしかない鏡なの。企業の良い所も悪い所もそのまま写し出す真実の鏡。鏡は決してしゃべらないし動かない。でも、絶対嘘はつかないから、みんな信頼して鏡を見てくれるのよ。だから、これからも鏡をピカピカに磨いていつてね、カッキー」

「 あっー、もう六時半じゃない！ 運転手さん、富山空港まで死ぬほど飛ばして！

もう赤信号なんて無視していいわ、私が許す」

萌さんが腕時計を気にしながら、タクシীর運転手に向かって命令している。

「 ……萌さん。あなたには道路交通法を無視してもいい権力なんて持ってないですよ。無茶を言ったら運転手さんに悪いですよ」

「 なんなのよ、カッキー。感じ悪いわねえ。私はどうしても早く東京に帰りたい

の！ あなたに私の合コンを邪魔する権力なんてあるの？」

「えっ……萌さん、もしかして今日は合コンが入っていたから、朝からずっと時間を気にしていたのですか!？」

「しまった、つい言ってしまったわ」

「萌さん、また合コンに行くんですか」

「また行くんですか、とは失礼ね。今日はちゃんと作戦を考えてきたから大丈夫よ。今回はスチュワーデスのふりをするの。帰りの飛行機でスッチーの仕事とかよく観察しなくっちゃ」

「また、職業を偽るんですか？ いくら女性会計士が堅そうだし年収も高いから男性から敬遠されるとはいえ、嘘をつくのはよくないと思いますよ」

「もっ、うるさいわねえ。私たちって飛行機の出張が多いからスッチーみたいなもんじゃな〜」

「いいえ。たとえ飛行機の出張が多いとはいえ、スッチーとはまったく世界が違います」

「だいたい、世の男性にスッチーとか看護婦みたいな制服好きが多いのがよくない

のよ！ 私たち会計士にもかわいい制服があればいいのに」

「嫌です。制服なんて死んでも嫌です」

タクシーの中では、監査の話をしなのは鉄則である。

僕は思った。

だからといって、こんなどうでもいい話をしなくてもいいのに、と。

